

コロナ禍における結婚式に関する考察

－アンケート調査の分析を中心に－

増田 榮美
MASUDA Emi

キーワード：コロナ禍の結婚式・結婚式の多様化・オンライン化・結婚式の意義

はじめに

本論文では、withコロナ時代の結婚式がどのように行われているかを検証し、アフターコロナを見据えて、結婚式がどのように変わっていくべきかを考究、提言するものである。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、2019年12月に中華人民共和国湖北省武漢市で「原因不明のウイルス性肺炎」として確認されて以降、日本でも2020年1月15日に初めての感染例が確認された。その後は世界的に感染が拡大し、2020年3月11日に世界保健機関WHOのテドロス事務局長が「新型コロナウイルスはパンデミックと言える」と述べるに至った。我が国においても、2月25日に政府により新型コロナウイルス感染症対策の基本方針が決定、3月26日に政府対策本部が設置され、4月7日には新型インフルエンザ等対策特別措置法（以下「特別措置法」）に基づく緊急事態宣言が発出された。5月25日には全面解除されたものの、2021年1月8日からは再び緊急事態宣言が発出、その後も再発出と解除を繰り返しており、世界的な流行は未だ継続中で収束の目処は立っていない。

コロナ禍においては様々な業界に影響が広がっているが、ブライダル業界も例外ではない。公益社団法人日本ブライダル文化振興協会（以下BIA）が協会会員の婚礼施設を対象に実施した「新型コロナウイルス感染症影響度調査」によると、業界全体で2020年度（4-3月）は、9,500億円の損失（前年比▲68.0%）、約28万組に影響があったものと推計されている。このような厳しい状況を少しでも改善するため、婚礼施設各社では様々な対策を施し、安心安全な結婚式を実施してもらうべく努力を続けており、少しずつ婚礼件数が戻りつつある。しかし、2021年度上期（4-9月）は19年度比▲35.0%で推移、通期（4-3月）では▲24.0%と依然厳しい状況

が続いている。

ブライダル業界の売上げをコロナ前の水準に戻すには、コロナ禍であっても新郎新婦が結婚式を挙げたいと思えるような安心・安全な環境を整えることが必要である。そこで、実際に結婚式の実施に踏み切ったカップルと、キャンセルまたは延期を決断したカップルの違いや、招待されたゲストの気持ちを分析することで、withコロナの結婚式に必要なとされる安心材料を明らかにしたい。

コロナ禍では、人々が集う飲食や密室での会話はもちろん、人と会うこと自体が制限されている。このような状況下でも結婚式を実施した人は、どのような結婚式を行ったのだろうか。コロナ禍で新たに生み出された結婚式の実施方法を分析し、アフターコロナで標準化されていく要素を見極めたい。また、このような状況下でも結婚式を実施する意義を考えることで、今後の結婚式のあり方や、結婚式を実施しない、いわゆるナシ婚層¹（以下ナシ婚層）の今後の動向を明確にしたい。

なお、本稿では「ウェディング」の表記を基本とするが、アンケート調査を実施した企業名や、その企業のアンケート項目に「ウェディング」と表記されている場合はそのまま使用するものとする。

1. コロナ禍における婚礼の現状

ブライダル業界の現状

結婚式のマーケットは、コロナ以前 1.4兆円規模だったが、2020年は約0.4兆円にまで縮み、1兆円が市場から蒸発した。厚生労働省の人口動態統計によると、2020年の婚姻組数は525,507組で、2019年から2020年にかけて一気に12.3%（73,500組）減少している（「令和2年人口動態統計（確定数）」厚生労働省）。

結婚式は、リーマンショックの後も、東日本大震災の後も、どのような不況であっても「ハレの日」である結婚式を行いたいという需要は根強く、ほとんど影響を受けなかったという。コロナ禍の危機はブライダル業界にとって初めてのことでありといえる（週刊東洋経済 2021.7.31）。

厚生労働省は、新型コロナへの対策として、クラスターの発生を防止することが重要だとし、いわゆる「三密の回避」を国民に指示した。三密とは、「換気の悪い密閉空間」「多勢が集まる密集場所」「間近で会話や発声する密接場面」のことであるが、このどれもが結婚式の場面と結びつく。また、結婚式の列席者には、感染すると重篤化しやすい年配者がいる。職場のゲストを招待することで個人的イベントに起因する職場クラスター発生の可能性もある。このような様々なリスクが考えられるだけでなく、緊急事態宣言下での宴会に対する人数や時間の制限がある中で社会的に実施しにくい側面もあり、一度予約をしていた結婚式を延期したり、キャ

ンセルしたりするカップルが多くなったと考えられる。リクルートブライダル総研（以下ブライダル総研）の「婚姻延期に関する調査」によると、2020年に婚姻予定であった人のうち、24.7%が延期および取りやめを決断したという。2019年の延期・取りやめは9.7%だったため、15%上昇したことになる。その多くは新型コロナの影響が背景にあるものとみられる（リクルートブライダル総研 2021. 11. 15）。

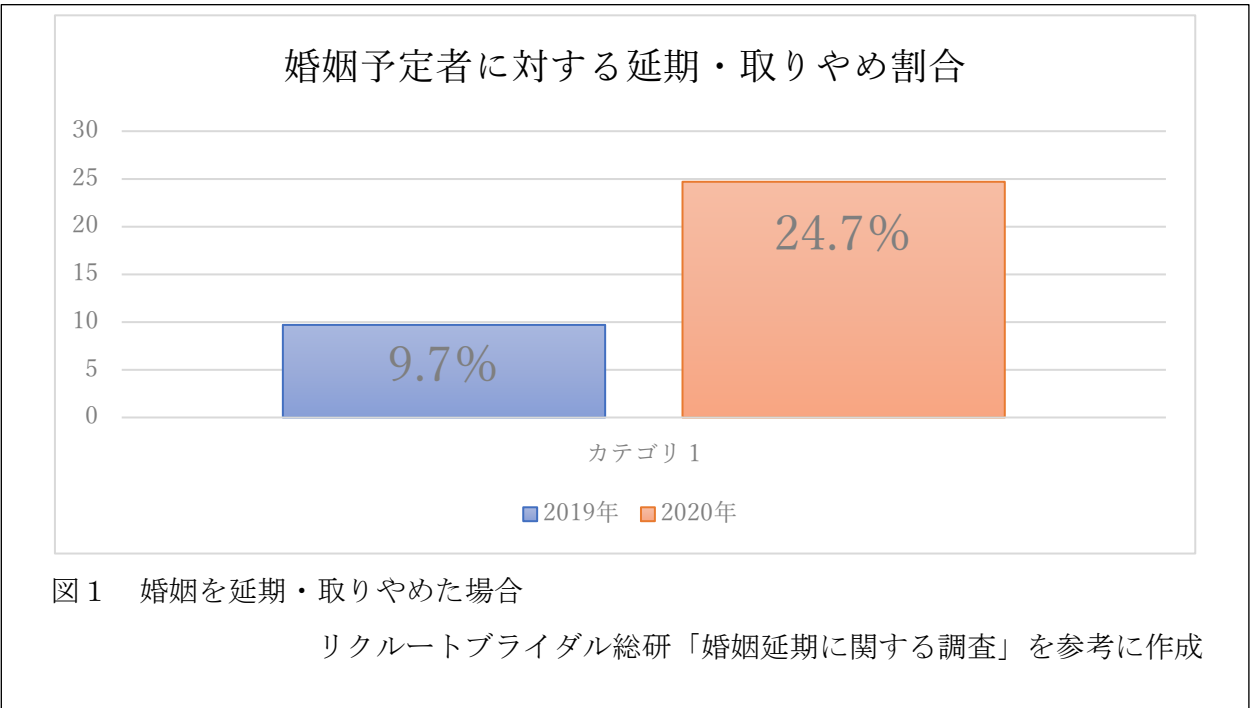


図1 婚姻を延期・取りやめた場合

リクルートブライダル総研「婚姻延期に関する調査」を参考に作成

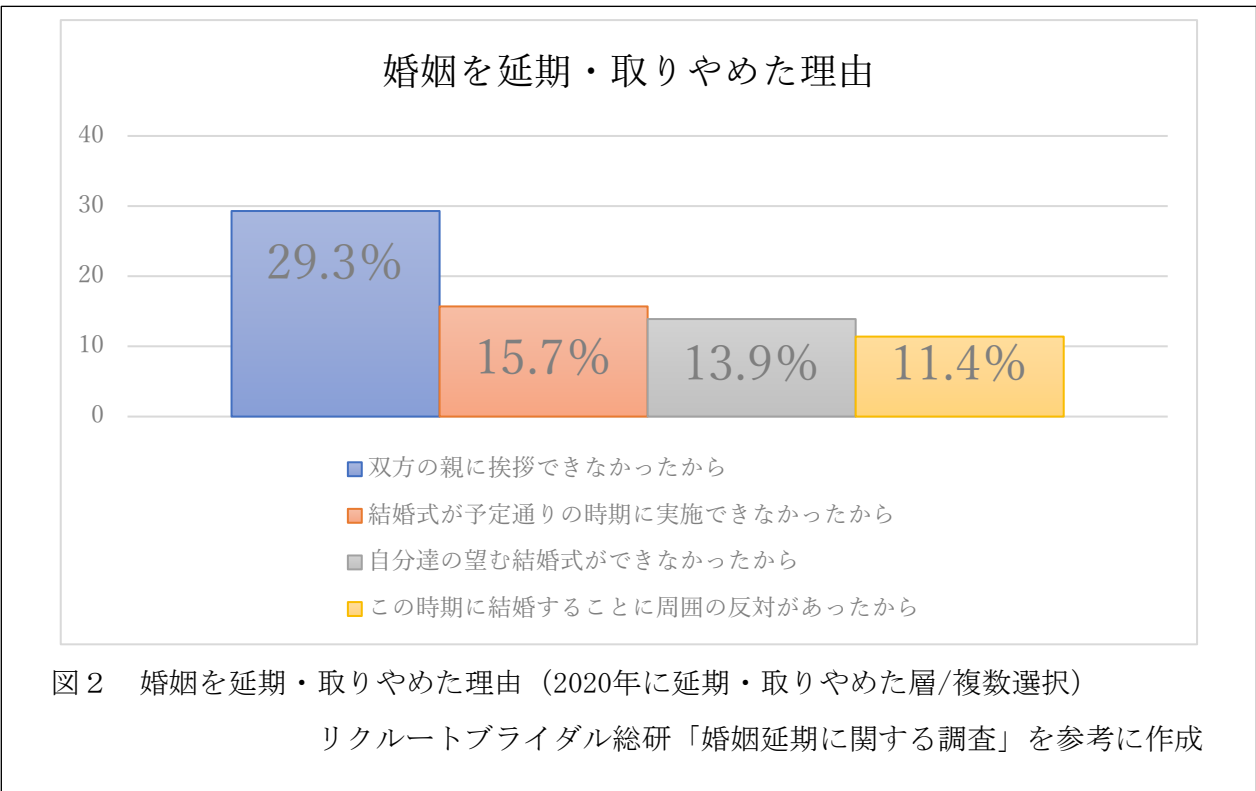


図2 婚姻を延期・取りやめた理由（2020年に延期・取りやめた層/複数選択）

リクルートブライダル総研「婚姻延期に関する調査」を参考に作成

婚姻を延期・取りやめたカップルの理由は、「双方の親に挨拶ができない」が最も多く29.3%に上った。その他を除く2位、3位は「結婚式が予定通りの時期に実施できない」(15.7%)、「自分たちの望む結婚式ができない」(13.9%)で、三密を避けるため、接触や移動、人数制限を強いられたコロナ禍ならではの状況が浮き彫りになったといえる(リクルートブライダル総研2021.11.15)。

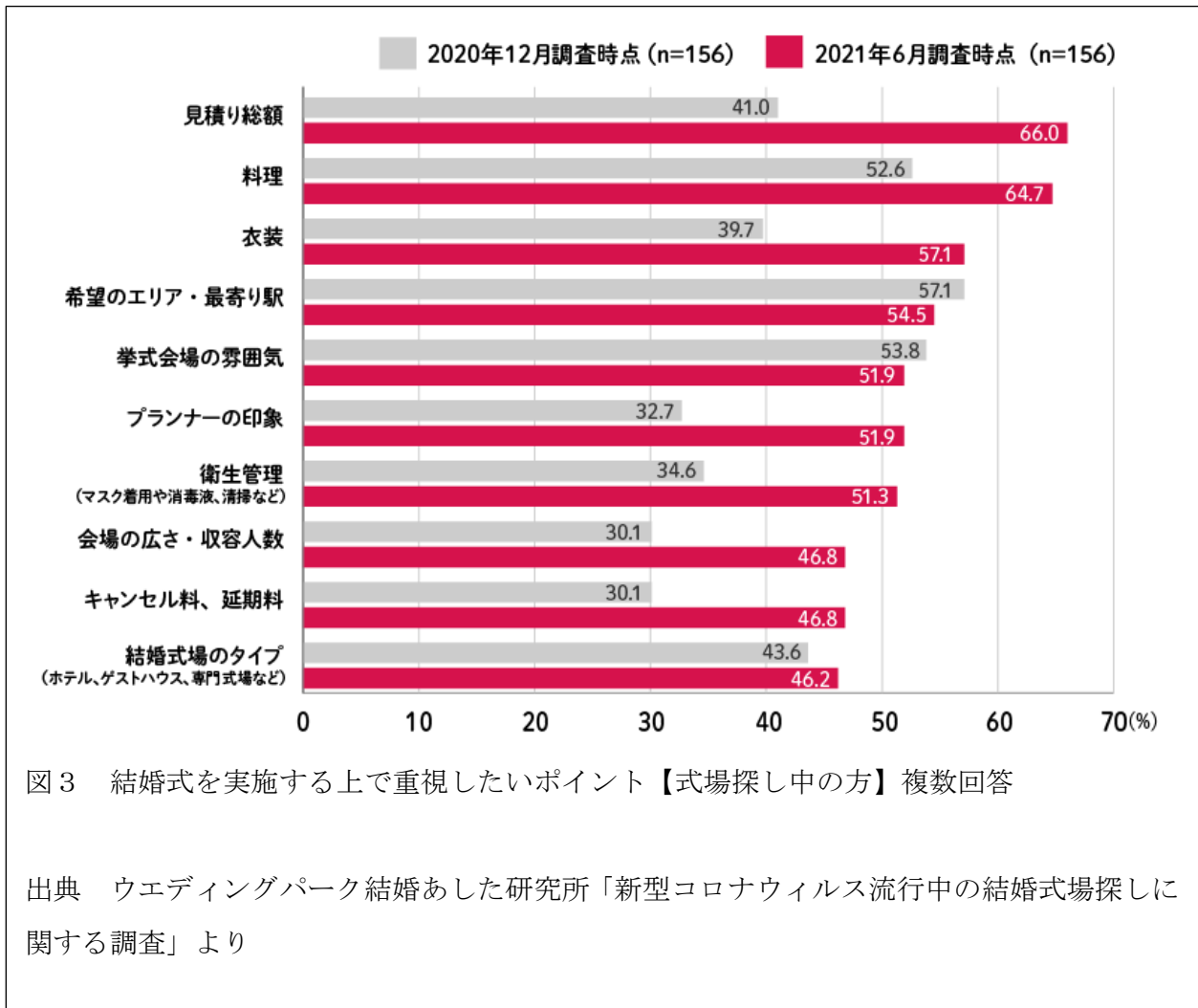
婚姻を延期・取りやめた人のうち結婚式が理由だった層の自由回答をみると、「ゲストにたくさんきてもらい自分達の結婚を祝ってもらいたかった」や、「お互いの親しき方々に認めていただき、祝福して欲しかった」、「一生に一度のことなので、一連の形式をきちんと行って、区切りをつけたかったから」、「挙式することが結婚の大前提であると考えていたため」などが挙げられていた。コロナ禍ならではの側面はもちろんであるが、一生に一度という思いが強いイベントにおける祝いの機会を大切に、苦渋の決断をしたものと思われる。また、リクルートブライダル総研の落合歩氏は、「結婚式ができないという理由は、婚姻延期・取りやめの理由で最も多かった「親に挨拶ができない」とも共通して、ある種の「規範意識」が根底にある層が多いことが背景として考えられる」としている(リクルートブライダル総研2021.11.15)。

2. コロナ禍の結婚式

コロナ禍で結婚式を実施する決断をしたカップルにも影響は及んでいる。「アンシェウエディング 結婚準備ガイド調べ」によると、2020年3月～8月に結婚式を実施したカップルの63.9%がゲスト人数を減らしたことがわかった。緊急事態宣言下という事情もあり、規模を縮小した家族婚や、移動距離が少ない一部の親戚や友人だけの小規模婚になったことが窺える。結婚式の内容を変更したカップルも80.6%に及んでいる。変更した内容としては、お酌の禁止、席の間隔を空ける、食事中以外はマスク着用、テーブルラウンドの中止、余興の中止、リモート披露宴の実施、などとなっている(アンシェウエディング 結婚準備ガイド調べ)。いずれもコロナ禍ならではの特殊な事情が見て取れる。

ウェディングパークが2021年6月に実施した「新型コロナウイルス流行中の結婚式場探し」に関する調査によると、調査時点で結婚式場を検討している人に「結婚式をする上で重視したいと思っていること」を複数回答で質問したところ、2020年12月の調査と比較して、「見積もり総額」「プランナーの印象」「衛生管理(マスクの着用や消毒液、清掃など)」「会場の広さ・収容人数」「キャンセル料・延期料」などの項目の割合が増加したという。コロナ禍の結婚式実施において、費用や感染症対策をより重視するようになったことを示唆している。

2020年7月、ワタベウェディング株式会社は、挙式をしておらず、2年以内に挙式を希望する20代・30代の未婚・既婚男女300名に「withコロナ時代のウェディング意識調査」を実施した。それによると、「withコロナ時代に必要だと思う結婚式のサービスはありますか」という問いに



複数回答で当てはまるものを答えてもらったところ、全体の1位は「ゲストのマスクの着用」で44.0%、2位は「屋外での開催」で39.7%、3位は「新郎新婦のマスク着用」で29.0%、続いて「オンライン・バーチャル結婚式」23.7%、「結婚式のLIVE配信」22.0%という結果となった。

これらの調査結果から、コロナ禍であっても結婚式を実施、参列してもらうには感染対策が必須であることがわかる。

約350の式場やホテルが加盟するBIAでは、結婚式に参列するゲスト及び従業員、結婚式に係わる関連スタッフ全員をコロナウイルス感染のリスクから守るため、2020年5月に「新型コロナウイルス感染拡大防止ガイドライン」を策定している。2021年12月には改訂を行い、内閣官房ホームページにも業種ガイドラインとして掲載している（BIA会員向けメール配信資料）。それには、感染防止対策を12の項目や場面にわけて、感染リスクについての説明、消毒の方法、行動規範などが丁寧に記載されている。末尾には結婚式場業「新型コロナウイルス感染拡大防止ガイドライン」の要点をまとめたチェックリストがあり、順を追ってチェックすることで式場側の感染対策は万全の体制となる。これにより、安全な結婚式を実施することができるとい

う安心感につながり、新郎新婦からの信頼を得ることになる。

withコロナ時代の結婚式は、感染対策が加わった一方で祝辞や余興がなくなるなど新しいスタイルとなりつつあるが、コロナ禍で招待されたゲストはどう思っているのだろうか。

ブライダル総研による「結婚総合意識調査2021」によると、2020年4月～2021年3月に出席したゲストの55.9%が参加を迷わなかったと回答している。1回目の緊急事態宣言下の2020年4月～6月は46%だったが、再び緊急事態宣言が発出された2021年1月～3月では60.2%となり、参加することへの不安感が和らいでいることが窺える。また、参加を迷わなかった人が、出席して良かったと答えた割合は88.6%、出席を迷った人を加えても80.5%と高い満足度を示した。良かった、感動した、と答えた割合が2017年、2018年と比較して最多となり、周囲の人・仲間の大切さを感じたという人も前回調査よりも増加している。出席者の年代別でみると、60代以上が90.9%と特に高く、重症化リスクがあるにも係わらず、高齢の親族が参加できたことに喜びを感じていることがわかる。コロナ禍で人と会う機会を制限され、人とのつながりが薄れていることの影響が反映されていることを示唆している。

一方で、3人に1人（33.0%）の招待客はコロナが理由で参加を迷ったと回答していることも注視しなければならないだろう。出席後の満足度を調査した結果、「当日の感染症対策の状況が、コロナにより参加を迷った出席者の満足度に大きく影響している」ことがわかった（リク

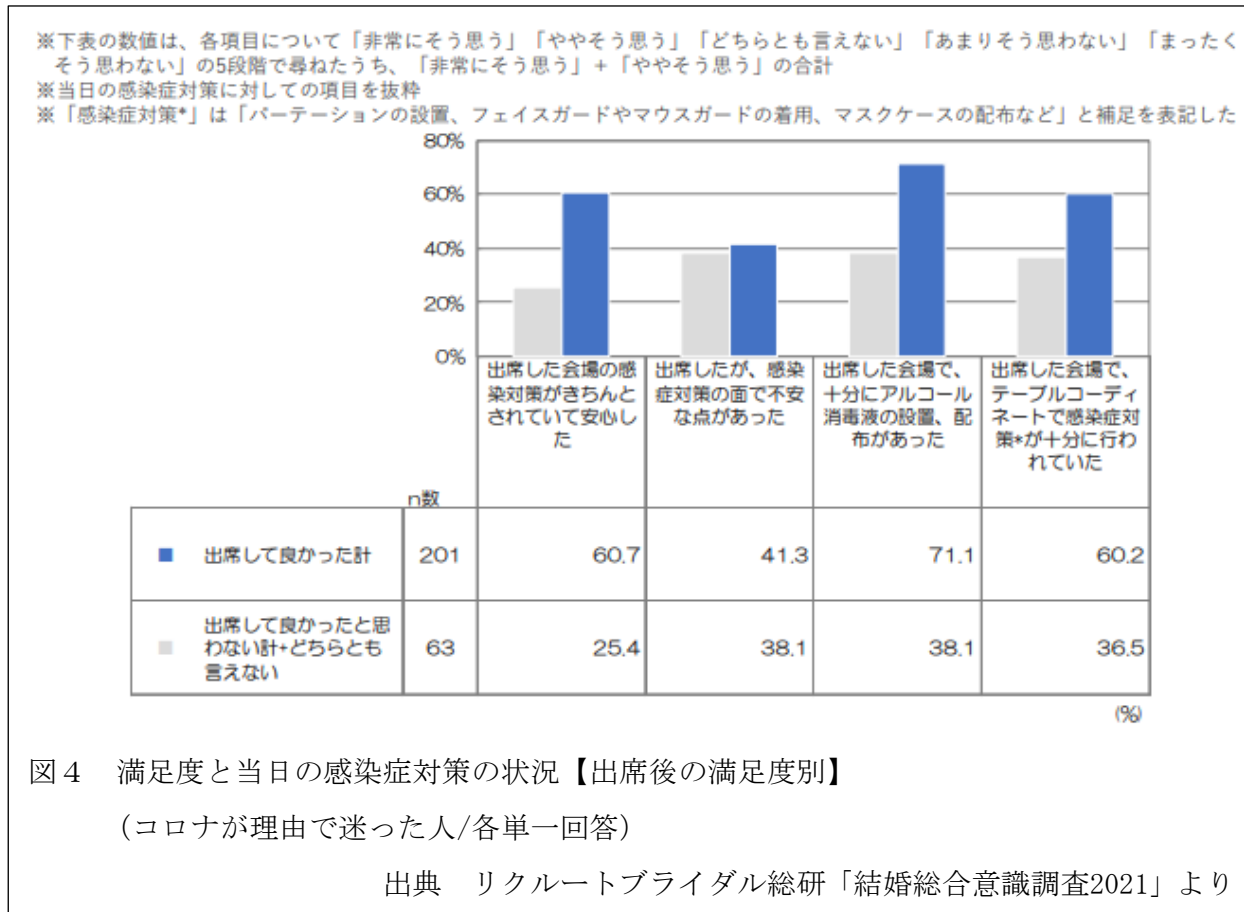


図4 満足度と当日の感染症対策の状況【出席後の満足度別】

(コロナが理由で迷った人/各単一回答)

出典 リクルートブライダル総研「結婚総合意識調査2021」より

ルートブライダル総研2021)。コロナが理由で参加を迷った人のうち、出席して良かったと答えた人は、60.2%の割合で感染症対策に満足しているが、出席して良かったと思わない人は36.5%が感染症対策が不十分と感じている。もともと参加には消極的で感染リスクに不安があるため、式場の感染対策にはシビアな評価をしていると考えられ、感染症対策が、安心して参加できる条件となっていることがわかる。

3. コロナ禍による結婚式の多様化

実施したウエディングイベントの組み合わせの多様化

コロナ禍の結婚式の特徴として、招待客人数が少ないことが挙げられる。によると、コロナ以前、招待客は全国平均66.3人だったが、コロナ禍では42.8人で、親族を中心にごく近い友人だけを招待しているようである。

新型コロナの影響として、「列席者・招待客を限定した」(68.2%)、「アルコール消毒液を設置、配布した」(61.2%)、「テーブルコーディネートで感染症対策を行った」(51.9%)、「列席者・招待客の申し出により出席キャンセルが発生した」(51.3%)、「挙式・披露宴・ウエディングパーティ中の演出を減らした、取りやめた」(34.6%)などが挙げられ、感染症対策として実施したものが上位を占めていることがわかる(ゼクシィ結婚トレンド調査2021)。

このように感染症対策など様々な制約があるコロナ禍での結婚式の傾向の1つとして、ウエディングイベントの組み合わせの多様化が挙げられる。結婚総合意識調査2021によると、昨年よりも実施率が増加したイベントは、「披露宴・ウエディングパーティ、親族食事会、2次会以外のウエディングパーティ」、「エンゲージメントフォト²」、「エンゲージメントフォト・スタジオ撮影・ロケーション撮影以外のウエディングフォト」の3つである。一方で、上記3イベントは、いずれも従来の主流である挙式、披露宴・ウエディングパーティ、親族食事会と並行して実施している割合が高いということがわかっている。ブライダル総研研究員の豊澤氏は「新郎新婦が、コロナ禍において「今できる」形を模索する中で、ウエディングイベントを複数組み合わせで実施し、各イベント内容をバージョンアップしながら、新郎新婦の思いを実現していた」と分析している(結婚総合意識調査2021)。株式会社ウエディングパーク(以下ウエディングパーク)が実施した「フォトウエディング・結婚式前撮りの実施」に関するアンケート調査³でも、フォトウエディング実施層(51.7%)は、未実施層(23.7%)と比較して挙式・披露宴の実施率が2倍以上となっていることがわかる。つまり、コロナ禍で制約が多い中、新郎新婦が今できることに優先順位をつけ、より理想的な結婚式に近づけるための落としどころを見つけるため複数のイベントを組み合わせることで多様化したといえる。

これまでも時代の流れの中で結婚式は多様化してきた。例えば、1970年代の結婚ブームの際、結婚式場の予約が全く取れないという状況が生まれ、結婚式を挙げたくても予約が取れずあぶ

れてしまったカップルにより挙式スタイルの多様化が進んでいる。結婚プロデューサーが登場したり、相次ぐ有名人による海外挙式や軽井沢での教会式の報道に注目して海外やリゾートに目を向けたり、また、神前式では予約が難しいため教会挙式に着目するようになったことが、挙式多様化の第一歩となった（増田2011）。

1970年代は、高度経済成長を支えてきた団塊の世代が結婚適齢期を迎えたことで結婚式が派手化していった時代である。広く結婚を披露することで社会的立場を強固なものにしたいという形式や見栄にとらわれている背景と、女性が社会進出したことで、新婦側の社会的なつながりも大切にしていくという傾向が強まり、列席者が会社関係者を中心に増え、披露宴は徐々に豪華になっていったと考えられる（石井2005）。当時話題となったドライアイスの演出やゴンドラでの登場、現代の定番ともいえるお色直し入場時のキャンドルサービスはこの頃誕生しており、演出方法の多様化が進んでいる。

このように、社会情勢や経済状況などで、対応を迫られる状況に陥ったときに多様化が進み、その中で定着したものが標準化されていくのである。

4. アフターコロナを見据えて

コロナ禍では、人との接触を減らすためにテレワークが普及し、オンラインでのやりとりが一般化しつつある。結婚式の打ち合わせも例外ではなく、会場を決定した後の打ち合わせにオンラインを利用したカップルが増加した。ゼクシイトレンド調査2021によると、「会場を決めた後の段階でのオンライン打ち合わせ」に会場が「対応していた」と回答した割合は時期を追うごとに増加し、直近期間「2021年1月～3月」では半数以上が対応していたと答えている。オンラインチャネルの重要性が高まっていることから、オンライン接客やオンライン結婚式に取り組んでいる企業が多くなっていることが窺える。実際にオンラインでの打ち合わせを利用した人は40%前後で、まだそこまで多くは利用されていないが、アフターコロナを見据えると、打ち合わせ手段の一つとして以外にも大いに利用価値のあるものだと考える。船井総研によると、元来、ブライダル業界は非常にアナログな業界だという。発注関係は未だFAXが多用され、式場によっては、顧客管理もアナログで紙を使った顧客ファイルを使用しているところもある。また、見積もりや提案シートを作るのに20～30分待ってもらうことも日常茶飯事である。これまではデジタル化やクラウド化への投資を積極的に行ってこなかったが、格段に生産性を高めることができるのは明らかである。コロナ禍でデジタル化を推進した式場は、今後、大きく成長できるチャンスを得たといってもいいだろう。

コロナ禍を機にオンライン化を積極的に導入した式場は、オンライン結婚式への対応だけでなく、ブライダルフェア・模擬結婚式をオンライン上で実施できるようになり、さらに可能性が広がるのである。

コロナ禍による制約を受けたことで、結婚式の演出やエンゲージメントフォトなどのイベントの組み合わせが多様化したり、オンラインでの打ち合わせや結婚式が導入されたりしたことが明らかになった。アフターコロナを見据え、今のうちに多様化やオンライン化に対応した変革を積極的に進めた式場が、今後躍進していくことになるだろう。

(1) アフターコロナの結婚式

コロナ禍による多様化の中で、今後標準化されていくものを見極めることが重要である。

ウエディングパークが実施した「フォトウエディング・結婚式前撮りの実施」に関するアンケート調査によると、今後もフォトウエディングの実施が定着していくことが推察される。

フォトウエディング実施理由を挙式・披露宴実施の有無に分けて見ると、実施層では「挙式・披露宴とは違う衣装を着たかったので (48.0%)」「撮影した写真を挙式・披露宴当日に使いたかったので (ウェルカムボードや演出など) (41.2%)」「挙式・披露宴とは違う場所で写真を撮影したかったので (34.0%)」が上位となり、新郎新婦が写真撮影を楽しみ、2人の写真を大切にしたいという思いが感じられる。また、挙式・披露宴の当日はゲストとの時間を大切に考え、結婚写真に時間が取られないよう、別途フォトウエディングをすることが定着していると考えられる。SNSなどによって結婚写真に触れる機会が増えたためか「撮影が楽しそうだったため (27.2%)」も5位となっている。デジタルネイティブといわれる、いわゆるZ世代⁴のインターネットを活用した結婚準備によって、今後もフォトウエディングを実施する人が増加・定着する可能性が高いと推察されている (ウエディングパーク2021)。

一方、挙式・披露宴未実施層では、「挙式・披露宴をする予定がないため結婚式の代わりとなる記念にしたかったので (59.1%)」「(自分のために) 写真を残したかったので (45.6%)」「(親やその他家族のために) 写真を残したかった、またはご両親から写真を残して欲しいと言われたので (43.0%)」「ウエディングドレスを着たかったので (37.7%)」が上位となり、多様化が進む中で、結婚を祝う選択肢の一つとして、結婚式に代えてフォトウエディングを選択する人が多いことが窺える。アフターコロナでも、もともと結婚式に消極的な人などは結婚式の代わりに写真撮影をする層として一定程度いると考えられる。写真を利用した結婚式プランは需要が見込めると思われる。

オンライン結婚式も多様化の流れの中で生まれた新たなスタイルである。しかし、実際に利用した人は少ない。ゼクシィ結婚トレンド調査2021によると、一部オンラインによる結婚式を知っていた人のうち、41.2%が実施を検討したものの、実際に実施した人は15.1%に留まっている。その理由として、「招待客とは実際に会って一緒に過ごしたいから」が最も多く59.4%に上った。ゲストと同じ場所で時間や感動を共有し、晴れ姿を見てもらい、直に言葉を交わすといったリアル感を大切にしていることが窺える。こうしたことから、リアルな結婚式にいか

近づけるかがオンライン結婚式に求められているといえる。

プリンスホテルでは、リアル結婚式の価値を体験できるリモートウェディングを提案している。『日経XTREND』2011年8月号によると、このプランの最大の特徴は「多拠点型」ということである。全国にあるプリンスホテルの12会場から複数の会場を選び、それぞれの会場に近隣のゲストを招待するというもので、会場同士をオンラインでつなぎ、プロジェクターなどを介して式の様子を同時中継する。どの会場にいても同じコース料理を提供することで、離れた場所にいながらも同じ体験を共有することができるという。ただ、新郎新婦のいない会場にいるゲストは長時間になれば飽きてしまうかもしれないし、お開き後に新郎新婦との交流ができず物足りないと感じてしまうだろう。そのため、プリンスホテルでは、水族館やゴルフなど付帯施設のレジャーを、結婚式前後に楽しめるよう提案している。

ただ、このようなリモートウェディングが実施できるのは、プリンスホテルのような他拠点施設を持つ大規模企業に限られる。一般的な式場では対応できないのが現状である。前述の通り、オンライン結婚式を検討したカップルのうち、実際に実施したケースは15%余りということを押まえると、アフターコロナでの標準化は難しいと考える。オンライン結婚式が普及するには、設備投資に見合うだけの実施件数を獲得することが必要であり、それには、オンラインチャンネルにおける体験価値をいかに高めるかが課題といえよう。

(2) コロナ禍で見えた婚礼の意義

コロナ禍により、多くの人に影響を受け、結婚式の延期やキャンセルを余儀なくされ、実施率はコロナ以前に比べ減少した。一方で、結婚式を実施したいと回答した割合は昨年より微増でほぼ横ばいとなっている。ブライダル総研の豊澤氏は「新型コロナウイルスの影響で、結婚式を当たり前でできなくなった状況下でも、結婚を機に何らかのパーティを実施したい、というニーズが減っていないことが明らかになった」と分析している(結婚総合意識調査2021)。また、結婚式を実施しなかった人のうち約3人に1人は、「新型コロナウイルスの影響を受けて延期したが、いつかは実施する予定」と回答しており、コロナ禍が収束することを待っている層が一定数いることが窺える。世界的なパンデミックに直面しても、結婚式をすることの意義や価値が大きいと考えている人が多いことがわかる。

結婚式を実施した人も、「今後のライフプランを考えるきっかけになった」と回答した人は55.8%で、前年よりも5.8%増加しており、コロナ禍という特殊な環境下であっても人生の節目となる結婚式を実施することで、今後の人生について改めて考えるいい機会となり、意義深いと感じていることが推察される。

コロナ禍の結婚式に招待されるゲストにとっても、その価値が見直されている。前述の通り、2020年4月～2021年3月の間に、結婚式に参加したゲストは、結婚式を楽しみにする気持ちや、

出席して良かった、感動した、と回答した割合が、過去2回の調査と比較して最多となっている（結婚総合意識調査2021）。「周囲の人・仲間の大切さを感じた」「久しく連絡が取れていない人とのやりとりのきっかけになった」と答えた割合も前回調査よりも高くなっている。コロナ禍で人に会う機会が限られている中で、結婚式は人とつながる貴重な場となったのではないかと考える。特に60代以上の満足度が90.9%と非常に高く、重症化リスクがあるにも係わらず、高齢の親族が参加できたことに喜びを感じていることがわかる。また、ブライダル総研の豊島氏によると、「子どもの結婚式に対しての親の気持ちの上位は、「晴れ姿を見たい」「周囲との関係性が見られ安心できる」など、子の幸せを願う気持ちはもちろん、「子育て卒業の節目」など、親自身の今後の人生にとっての意味合いも高いということが明確になり、特にその傾向は母親で顕著に見られている」という。高齢化が進む現代において、親や親族などの高齢者を結婚式に招待することは、意義深いことがわかる。新郎新婦や、ゲスト一人ひとりにとっては、人々が同じ時間、同じ場所で感動やお祝いの気持ちを共有することも意義や価値のあることなのである。

おわりに

コロナ禍で、不要不急のイベントの自粛が求められ、2020年の結婚式実施件数は大幅に減少した。結婚式は飲食を伴い、人々が一つの空間に集まるため、感染リスクが心配されたためである。こうした状況下での結婚式では、安全に開催するためにも、安心して出席するためにも、感染対策が必須であることが明らかになった。そのために、BIAでは「新型コロナウイルス感染拡大防止ガイドライン」を策定している。今後も、新型コロナが収束するまで、状況に応じて改訂し、ブラッシュアップしていくことが必要である。

コロナ禍ではオンライン化が促進され、打ち合わせや結婚式に取入れられた。リモートでの打ち合わせは、今後定着していくものと推察される。すべての打ち合わせに利用するのではなく、リゾートウェディングなど遠方で頻繁に来館できない人や、忙しくて来館時間が取れない人などには利便性が高いツールといえる。アフターコロナを見据えて、早い段階で環境を整えておくことが肝要である。

『25ans Wedding 2021Autumn』に、元宝塚歌劇団男役スターの壺城あずささんのコロナ禍での結婚式について、「信じることの大切さを知った感謝のウェディング」と題した記事が掲載されている。この記事の中で壺城さんは、当たり前に行えることが困難になり、改めて結婚式をする意味を見つめ直すことができたと言っている。感染対策に力を尽くしてくれるホテルスタッフや、コロナ禍の不安の中出席してくれた人への感謝と感動が味わえたという。このように、コロナ禍という特殊な環境だったからこそ、結婚式の意義を改めて考える人も多かった。様々な調査結果から、結婚式を実施した新郎新婦のみならず、招待されたゲストも、結婚式は

意義深く、価値のあるものとして捉えていることが明らかになっている。今後は、結婚式をしない、いわゆるナシ婚層をターゲットに、こうしたことを念頭に入れた結婚式のプランを提供していくことが必要だと考える。

本稿では、様々なアンケート調査を俯瞰して分析した。その結果、コロナ禍においては結婚式の実施を見合わせているものの、収束した後、実施したいというカップルが多いことが明らかになった。実施できない状況が続くことでナシ婚層の増加が懸念されたが、コロナ禍を契機に結婚式の意義が改めて見直されていることから、結婚式の実施件数はコロナ以前の水準に近いところまで戻ることが期待できる。

今後は、新型コロナの感染状況を注視しながら実際に式場で調査を行い、コロナ禍で実施した結婚式の状況を詳しく分析したいと考えている。

注

- ¹ 挙式、披露宴を行わない入籍のみの結婚スタイルのこと。
- ² 婚約中のふたりをそのまま残した写真のこと。前撮り写真と違い、私服で、好きな場所での撮影が叶う自由度の高さが人気となっている（ゼクシィnet）。
- ³ 株式会社ウエディングパークが運営するフォトウエディング・前撮りの日本最大級クチコミサイト「Photorait（フォトレイト）」が実施した、18～49歳の既婚者89,839人および、2020年4月～2021年3月に結婚かつフォトウエディングや前撮りを実施した18歳～49歳1,515人を対象にした「フォトウエディング・結婚式前撮りの実施」に関するアンケート調査。
- ⁴ 電通によると、Z世代は一般に、1990年代半ばから2010年くらいまでに生まれた層といわれている。Z世代はYouTubeなどの動画サービスの影響も強く受け、動画を通じたコミュニケーションも活発で、一日中動画漬けといったライフスタイルの人も現れている。昨今では、GoogleやYahoo!で検索する代わりに「いきなりYouTubeで検索」といった行動も、この世代を含めて浸透してきている（電通報）。

【引用、参考文献】

- 石井研士，2005，『結婚式 幸せを創る儀式』日本放送出版協会。
- 株式会社日経BP，『日経 XTREND』40号，pp.24-26，2021/8。
- 厚生労働省「令和2年人口動態統計（確定数）」，2021/9。

公益社団法人日本ブライダル文化振興協会「第21回新型コロナウイルス感染症影響度調査集計結果」, 2021/11.

志田基与師, 1991, 『平成結婚式縁起——いまどきウェディングじじょう』日本経済新聞社.
東洋経済新報社, 『週刊東洋経済』2021年7月31日号, pp.82-87, 2021/7.

ハースト婦人画報社, 『25ans Wedding 2021Autumn』, pp.122-125, 2021/9.

増田榮美, 2010, 「軽井沢におけるリゾートウェディング市場の成立と展開」, 信州大学大学院
経済・社会政策科学研究科修士学位論文.

【引用、参考サイト】

ウェディングパーク 結婚あした研究所, 「フォトウェディング動向調2021」, 2021/9.

<https://kekkon-ashita.weddingpark.co.jp/photowedding-2021> 【最終閲覧日2021/12/27】

株式会社船井総合研究所 ブライダル経営.com 「2021年、コロナ禍の影響でブライダル業界の
市場動向はどうなる?」, 2021/1.

<https://bridal.funaisoken.co.jp/column/2021trend> 【最終閲覧日2021/12/27】

リクルートブライダル総研, 「婚姻延期に関する調査」, 2021/11.

https://souken.zexy.net/research_news/covid19.html 【最終閲覧日2021/12/27】

リクルートブライダル総研, 「結婚総合意識調査2021」, 2021/11.

https://souken.zexy.net/data/SG/msgi2021_release.pdf 【最終閲覧日2021/12/27】

リクルートブライダル総研, 「ゼクシィ結婚トレンド調査2021」, 2021/11.

https://souken.zexy.net/data/trend2021/XY_MT21_release.pdf 【最終閲覧日2021/12/27】